掌中蓼太蔑句集 二編

全

掌中蓼太發句集二篇

春之部

歳旦

初鶏や又市を待甲斐なきもの

若水や年ある時乃人ゑ物

とゝ彩の春ゑ物の こゝ枝を見付ゑ

鉢植の雪形をてくひしとりあるを

彩ゑんと鶯雲のうゑゑ交ゑ彩花のあけ

かのを愛しゑ

のゝそのゝ國いきとゝや 福寿草

東嚴山のゝ〳〵ろ振袖とゝ名ぶる孫

ゆゝゝゝゝ代鶴蓬せ ゝゝゝゝこの花やゝと

雪ゝゝ蕾のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ愛年

ゝゝゝ弦書七迎て四象の宝ゝゝゝゝゝ

ゝゝゝのゝゝの孫子ゝゝ入ゝゝ月

聖代

初霞 書柄の樓ゝも かゝ係ゝゝ

人日

若葉そゝ〳〵 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

沢蟹の殘 もうこゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

猿蹴ゝゝ山搖起ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

削氣

正月も彩ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

梅

梅の書ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

むゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

咲うめる梅とあらしの日数経て
待ふ絵ちまた和歌よ白雪や梅花
三弦も梅花時ありむ夜の笛
香ふ花ゆく点まえたるの梅花
梅の香ふ外よこ春ぬ梅を仰
別離梅
遠くも此木這とや む夜梅花
営

うらひすや月の昇のと日和元
営の彩隈さらは さ川言う那
春眠
営の井手戸明ぬ松う那
柳
むけりて たとまえ春よ柳式
春柳やうらく光のつ風さうを
いうちれ えるのふうう 柳う那

緒をとまるとまるぬるさ哉

都にて市ふかのまる柳哉

霞 彩嶺

馬借るくかをかゝ〳〵よりまとろ

大井川

落るもの霞もあへぬ大井川

大和彩御 留別

うゝろふも家ゐもをとさ霞うゝ

春月

南〳〵出さうもあるに おぼろ月

駿河の富士彩御 一乃氏女の琴浦

ゐるふ拝して

ふさといふも笠ぬきてや春の月

芸の月 横ひと枝 初ろひ哉

猫 哀

我屋の老猫またたびれて

鏡見ていさゐひさん猫の哀

おもひ森の尾よ鞆もしら猫の恋

白魚　雪帆楼

白魚やそんしたるやの壊れん

ふるゝ魚や波見けの風る友ちゝ

雪解

雪解や雪うゝ　百八十ち

余雪

砂こゝゝ雪乃雪ゝ武

春風

作とゝ多う結伽羅ちゝむ春の風

書函

秋晴れ傘へあるるや書乃函

春函やたうつさ見まを松の雪

ちゝ原の函硯よ清ゝ　仮名のゝん

風巾

きれ風巾の夕越ゆくやまのち山

海苔

仲春　海苔二枚

松梅と書て四月二月ゝ郡

神事の終りなりけの二月ゝ

紅絹裏のうつきをぬるむ水田ゝ

筆拾山

筆ゝ書むとへる山乃笑ひゝ

雉子

なの花やの梅をふまふ雉子の声

たまこふいあふ雉のほろゝ

雲雀

秋もすゝゝ雲ふ雲ゝとひゝる

菜の花ゝ蔭ゝく麦ゝ雲雀ゝ

蝶

梅木屋の蔭ゝ引ゝる蝶ゝ

[illegible]

蛙

[illegible]

亭[illegible]の[illegible]時[illegible]

[illegible]蘭[illegible]も荒く壊[illegible]

富士根方[illegible]

畑[illegible]や大[illegible]

草

人[illegible]

池田の宿[illegible]

[illegible]の[illegible]

菜花

菜の[illegible]乃[illegible]大和河内[illegible]

炉塞

炉[illegible]

雜

こるぬるの細くも雛の月秋小
ほそくと月見そこと兵の雛

胡葱

胡葱や小町の小町う和ちのこ
めさつこそうう潜ても　女文字

桃

桃咲くや半のうれもやまと雲

出代

おうりや飛ぶ井蔵く　揺町

花

花冥さん教ようこそあま　花さそ
花茨く稲荷さ月と成よりり
のこかりよ花ようこ　むの言
成佛の棺ゆくらん　をなけうう

東叡山

雲　雲や世ふをそこまて花切子

洛陽

雲一首もなき山ちゝ花の雪
傘さゝく賀茂の花のみやこ哉

旧邸

花ふるよりも花よりこそ雪の庵
深草の元政古墳

花ふる花ふる法の杖あり作とも

橘

ちる橘称ちる人あ僧とも紅梅
梅惜む老よりよりやちるけら
表さゝも三味線弾く人通

義山居

橘戸や猿まつけぬ猛ゝひ
日暮てたものもめちり山さゝ
ふ巌ゆ飛ちゝく百ちゝ橘
りゝもう老よ法ゆし義けら

麻辰の智月白象を失ひる時
ちとせ果てく宮を出るう 象橋
鄭濁 麻時ふく
後の代よ成て月よる時しる
美鮎
美鮎の小方者てく逆よりう
山吹
山吹や旭ちまてく年暮て南く

山吹や月も弱く沈あるや
茂
山寺や一日ふちち新ほうし
行春
切事や一茶ものまそれう
夏之部
更衣 雪舟と清あるは杖と衣て
いさ嵯峨も知てまそれ衣うえ

財布窓より隙なく一巻寂寥ありよく味
てう句を字治山の指南をまつ〻めて
涼切なるを写経の勇を去る
先門の蛙より用ありこころもこの〻
芭蕉

雷雨てふりかゝる芭蕉哉

郭公

見ぬ妻とこゝろ尽せる歩行旅かな
見うしなふ雲の墨ぬやほとゝぎす

郭公一声夏を去らせけり

耳をすまして牡丹よ郭公

約束の蝶懶し出でうかねて
行樹にて蝶こゝろあるやかくきす
雲霧よ雲まとまとをりり郭公

牡丹 時和九年四月廿又日涼川芭蕉庵
再興成就の日吏望義十七回忌を
まつりこゝろ

元こゝろく牡丹を蓮のうてを飛ん

白雲は空をかりきるうんかな
雪をまとうて雪の柳よ牡丹哉

青簾

風さえぬとゑのうしめやまさすれ

杜若

何の方へ冠を差せんかさのもと
幡越を使ハ高らしかきはたを

茄子　鯉

一富士の頂ゆくうろやうの茄子
面白は書なさ富や初かつを

箏

箏をゆり出を竹のあしを敷
竹の子やゆふ小ゆるせて高をゆり

鄭　大伴主

鄭よ風ふまぬもうれし虎ゆ石
いとゝ花と見ゑひいん すしの飯

花柚　葛陂山人の流を汲むと遠
柚の花や立湯〳〵乃待百篇
或人のまゆり山女のとてる貝ふらすて
ばたりうち宣の形さ〳〵柳ちり
小舟と以る柚と紛ひけり花と弱をれて
二月さの花柚も強し　星弘毒
一枝を〳〵ひ立てる花柚うれ

実桜

実さら〳〵やかを軽りき吉野山

下園　墓塚

京子さん歯音おそろし　木下雪

和歌浦

憂う移る茅ふの茂たし　和歌浦

後鳥羽帝御廟

百官ち立こ　俊こ　夏木立

蒲萄　水鶏　翡翠

源氏を市こそうけきうくし

蘆葉の奥ふ蓋ちさ水鶏哉
蓮ふ居く蓮ふ抱えぬ翡翠哉
川蟬の風うたるうとおもひ乃り
後ひ氏ふあうたる氏子ふ子ふ芦の湯
の舎ふ言つれる氏菓の一奥あり
三伯うう花ふいく所苔ふえれ
後く年温ふの古乃ふ苔ふ花
相花
酒桶の脊中ふ百ふ相乃花

蛍
抱ふ山ふ氏ふ冥の末ふ伝むはうふ哉
傘さして蛍ふ氏ふ乃ふ雪ふ秋ふ
冥の枕乃ふ所ふ川うふ蛍哉
端午ふて
ふふ所ふ我ふ氏ふ粽ふ
ふ世うふ古ふふ氏ふ塊ふ那
五月雨

作部なりし出羽へ行り 五月雨
はるさるれや 稽 藏 こさるる 芦の音
檜を漏る音 暗し 皐月雨

田植

新小日をうらひ出しうる田植歌
壹を星や二節こすち田うへかな
知らしてそ月より淋し 田植笠

青田 高麻深ち

青田なる青田小懸しく 高麻の糸
青田さへ〳〵 深寺 弘 右記なる

田草 若竹

秋の来る 左注なるこん 田草とり
それよ競そ 水 そ 水
岩を出る 蛙 さうこと 竹

稗糸 照射 勾兵衛

稗つくひや 新〳〵 新ひ 拾 小舟

新も鶴の毛ぬけかはるとて
祐成の行方恋せぬ恨射られ
時致を山のさなかにてさがし出し
敷き
隈部が書く墨の濃淡敷かるる
敷かりて後秋うす墨の月秋の
白骨観
夏痩のうろうろさがる孫蒐られ

夏草　庚辰の春郭をうつ魂を慰て
南孫更仙の別業あり
扶桑
さくさけ這ま伏屈とり
豆の葉や動くと撲ふまくる
動くうるたくむ波の家
豆の葉や動くと咲く恋ちく
夕月や空地の月歩　即菩提
藻花　凡
藻の葉や隠かさ水の中なる

たゝけつゝ風むゝ新のかけ見ゆ
風細やいさゝゝと夏きたる

氷室　祇園舍

六月を横手初る氷室かな
祇園舍や人をもてなす焼の蔭衣

富士指　白河関

吉野路富士沿衣や富士きて
片神を秋の風なるゝ月きたる

竹婦人

蓬生や子ぬゝひ然る竹婦人
七符とも三符ともいはぬ休婦人

團扇贈　おなじうのうちをやとれる月
雲ん新れ新の恋慕
をの出てかはゝゝ小船ゝゝ白團扇
清水より東武手初りとて

我新小笠原の関の清水うれ
涼ゝゝ人子新たゝゝ昔清水

家ふる川中小流々く清るかう那
山伏の汲ほしうくり清るかう事

暑　市丸

三味線をうう〳〵臼のせうくあり川さ家
大津強年丹波五さる暑さうれ
加〳〵家拍子ゆ小流ひ家小撥と屈
してハ家味ゴ音手ゆ枕元しる
我庵の夕アるんゆ暑さ家おのひおれて
帷子やぬけて風もあり川拍子うう

負徳翁宿跡多和口相寺

夏陰やもとれ傘のあ風とり
悼吏登翁

六月を経帷子ゆ名残れ
一周忌画像ゆ

秋ゆる人のゆぬけを泣日うを
三世長

仏さ人もたうさ六月の紙子う那
石碑造立

三伏の夏ゆうさ石の虜の那

蓮　夕立

菅笠の新うら蓮のうき葉かな

丹こまるハ葉とそ沢り蓮の花

まふさちや地ふハ書田の藻をけく

納涼

四辺とかゝ水よてく　納涼うな

町の燈ゆとへ揺や　夕まそ夏

昼代ふ伝技の石ゝぬ　すゝれ

六社宮法楽　俳諧ふ俳うとて京中を巡る寺

寺詣川の流を隔てゝ

我影も境内いれて　社源一

数ゝひ武隈の松ふいうゝ

秀老も松のおふり　下をゝみ

清秋

白鷺ふ烏帽子ふ美せをゝ　秋川

秋之

立秋

流ゆゝ茅の輪ふ　けさの秋

澄とあて藏ふもえやけさは秋
ひけりのうまちゝ亦より一篇ふれ

七夕　八日星

星て年琴ゝのまてくゝ文月增石郎
青月や素絹ふの こゝまて
星ゝ川る表淵の景忘ゝ隅田川
ふをさしゝ
星逢て雲ゝ橋ゝけよゝこゝ
立琴も孫せるゝ昇の二日　碎

秋草

ひさうはや牧まかろしのうや動ゝ
焼捨ふよろひふ女郎花
荒牧ゝ中て痩ゝ
阿房宮賦をよむ
鬼灯や三子人乃秋乃こゝ
招風ゝ置ゝ根ふ
魂祭　梔籠
月ゝれゝ人の新ゝ

亡妻の形見とむらく

逆火やふるひふるまぬ灯の影

氏寄の懸佛ちらさそ夏河原

焼蕎の中うさひし揚焼竈

稲　蠶　呂子

夕風や霧もうこかぬ稲むら

奥州壁田玉川

追ふく蠶年見えや川子鳥

引めけく私の月夜や呂子縄

案山子　河内源をるる

楠のうろひ葉やせうはこうしうる

人見えやものうこ家栗山子うる

秋蠅　秋蝶　蜻蛉

飯をまた這ふく来るかり秋の蠅

ゆく月をまたやもあれかりぬ秋のてふ

家所て去年ふまりや　あらぬ蝶

うこ家の日ふるさおさへ蜻蛉

虫　雪

日暮れても鳴き弱る虫の声
眼をはなす蓋なりけりの句
我影の踏まれまむ秋やさびしさを
行れ雲に覆ひ虫きりきりす
人ちりぬ命はあるぬ きりくす
見未来をかれ指折りさびしかりけり
（忘しまふて）
物寂や行くすの子忘し虫

秋風　花野

秋風や人さけ通る 塩のいそ
秋の風芙蓉は敷を見付けり
遅剥て秋ふかまる花野哉

秋夜　須戸　蕉

宿借て森さあ立ちたる次の秋
（流れ湖水）
秋の水は冥土を流れ行くなり
ある人はなくなられて

啓くとなる七夕川や鄙ぶり秋

上総子稚演

ふし〳〵波の深まあうゝ俤やゝ子らさと

農家なる八十の老を賀しく

菜の秋粋ふり行ける暮の那

秋暮　澂見坂

あらゝ海ゝ見えし秋のうれ

暮ゝ川新見合せく秋の蓋

眠我と墨水なる柳く

木母ちを力ふり秋ぶうれ

新屋敷客ゝゝ乃と秋の暮

吾帆撥

指ゝゝ帰帆ふゝ移と秋の蓋

高鍬毛氏寺懐古

襪紙かゝ人行ゝく妹のうれ

雪　小雪

二羽〳〵とゝゝ楽しく雪ふり

初雪や辛ふゝ雪の素

連花や動くもあるく　松乃井
賜ふ来る一荒見　出山寺
文殊寺納
山茶や文殊の智恵のむすびこぶ
武庫山
武庫山の眠さまたすまこもり哉
芭蕉　柿　待青
さるもしらぬ搖籃くゝる世紙哉
深くねて我とゆ引さく夫也とゝ
深柿や代々の家もあるも　撰柿し
待青や　如帰　答
良秋　二州橋急機石別荘　十六秋
ゆくとしかゝる手枝の柿や　九月
田家よりあそひて
浮雲毎時子動うたるや　九月
深川舟遊遥
川上と世間とや月の夜と　元禄義の
中され一本柳まつり
十人の月見の夜や　松動うり

廉波

笠ふるひとを弥代の宿る月見哉

名月や何ぞ寄もなくて白

名月やあらうつさんと思へども

名月や生れかはりて蛍なる松

名月や月よりあまる波もなし

名月や鳴くや溪村の松乃月

名月や鶏とけをぬるもあるとも

一谷

ふるさとの雲まる波や次ぐの月

いさよひや国うつあまる廉の雲

野分　相撲　歌舞伎　新綿

岩端の鶏吹えるあり　鶏分哉

こうろぎや見る目のあるよ相撲とも

眠江亭

ぼたんうつ酒のとぎ匂ふ　歌舞伎うつあり

星を今綿あるうつ紀日和哉

業

白菊や花のこゝろ[illegible]れて蕊の雫
蝶[illegible]り菊[illegible]吟人[illegible]れ
ひとすぢ[illegible]ふ[illegible]ぬ[illegible]やきくなかせ
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]む菊の酒

澳村重湯

魚の名も菊色[illegible]ち[illegible]

婆心公ゆく

[illegible]菊やあ[illegible]ち花[illegible]

白さうも浮世の[illegible]花や菊なかせ

後月　尾越鴨

白魚[illegible]こゝろ[illegible]やのちの月
稲[illegible]星[illegible]ちう後の月
尾を越[illegible]命ひそう　鴨の巻

紅葉　旅

人[illegible]の[illegible]ちる　[illegible]れ

流芳秋麦

花よりも紅葉[illegible]こゝ　後の郷
[illegible]の屋上[illegible]七巻乃

屋とりさめり
屋とりもきの幹を花瓶に初紅葉
月ふかく床月の影や小萩ぬる
猪さうの家の垣乃柏子うれ
めるもの屋敷にいりて
歌嵐や壁ぢち地味鳴も精より
釜うけく地味鳴のうゝ虫歌
麻　義水　九月尽
とまるの系とときの麻の葉

綿畑く歌四く秋を惜うう

冬之部

初時雨　小春

市中を新義深くもうれ
夜雨
傘打むこうよこそもれ初時雨
とも歌人重之新の繁昌する時雨哉
歌もきう歌よ繁盛る時雨れ

祖師芭蕉の忌日くをかまくら

墓を踏てくるしく搭むる春雨

後鳥羽の人々よりの時

身をしるべの霞ちりぬ　小春風

芭蕉忌　百回忌也七十年の今日まで

源川安清ちよ俳諧道の初うち和上

人の花の陰にて我知んと孫せられ

おもひおこす

我稚子よ小春の中ぞ　十二日

後鳥羽や忌籠も菜の匂ひたりし

桃舟亭にて真如めぐる

そもそも我忌や仮とも思ふりの茶に染ん

掛川より贈れる布にてひらく

冬枯や人丸墓に岳士まろも

新冬

さびしさの眼はしり方や石落の晩

十月のめくらそうや花ぬくもち

ちくさんて累ちさ菴の千葉うる

枯柳　冬牡丹　枯荷　鶏頭　冬籠

枯くて月を柳の淺草の那

妻ちく寒ゆめさめ戸や冬ほたん
ゐるとほるく一里八幡ゐるとり拍子ゑ
えねかりよ物拾ハせん みゑさゑゐ
おうひろひて月月ホ出ゐる冬籠

帰花　火桶　巨燵　ちろり　炬燵

表紙ともゆふ日もあり冬花
ゆゑ舟くうくもゐ　帰花
こゐれ春ゐ宮女の中ゐ火桶ゐ

松ホ炬燵へふくゑ　こゐ川のゐ
風ホこゐし梦ゐくゐのさゐ
子ゐ鳴うゐろ月夜の炬燵ゐ
冬二ゐの京ゐ濃ゐ紙衾

新ゐ　雪　氷　炭　灰　消火　水ゐ

新月ゑゑ雅ゐ　ゑ寺ゐ鐘の夢
橋ゐへ　橋ゐ　ゐて表紙ゐ
鴨ゑ　表ゐ　ゐ　ゐ　ゐて

[illegible]人[illegible]　炭二斗
牙延七面山にて
楷の史や祖師の朋友も眼あてに
[illegible]一形[illegible]の[illegible]
千鳥
押分て月こそ出れむらちとも
[illegible]
[illegible]
[illegible]

江戸本石町十軒店　萬笈堂英平吉藏

其角發句集　二冊　嵐雪句集　二冊
蓼太句集　六冊
俳諧文集　蟹守大人輯　高附言名の俳人の文纂輯　二冊
發句古今撰　同輯　附葛里連句集　三冊
俳諧新五百題　護物大人輯　二冊

彩五百題後編　同輯　二冊

發句類聚　蓼松大人重校　二冊

發句類題　雪中菴大人輯　二冊

發句五百題　白雄房撰　二冊

俳諧意の志ゑとる　葎雪庵北元大人輯　二冊

志の志ゑ見立　季吟の句を意の新ゑをふまえて
意の新ゑをふまえ集也

俳諧多燒灯　季吟の書　二冊

俳諧四季名寄　懷中小本　一冊

懷中本清義撰
季吟の大成なり

俳諧季吟伝授　懷中一牧撰　一冊

萬葉用字格　春雄上人撰
万葉集のこの形也

一冊

宣家卿の形也　一冊

今古二の形世　高井八穂大人撰　折本　一冊

尚古の那世　山本明清大人撰　折本　一冊

對照の形世　美濃波る大人撰　折本　一冊

音便撮要　真空上人撰　懷中本　一冊

子島の跡　中臣親満大人撰　一冊

此の書を色紙短冊などに書くとおも膳に成
もちひ古人の書ぶりうつしいるる